

【水の作文大賞】

当たり前前から有り難いへ

熊本県

熊本信愛女学院中学校

2年

尾崎 おざき 美晴 みはる

水道の蛇口をひねれば、きれいな水が出てくる。それは、私にとって当たり前のことだった。

そんな「当たり前」の意識が変わったのは、五年前の海外旅行がきっかけだった。

私は水を飲むうとして、グラスを持ち水道の蛇口をひねろうとした。すると祖母が、「水を飲むときはそのペットボトルの水を飲んでね。」と言ったのだ。私は驚かすにはいられなかった。水道の水をそのまま飲むことができるのは、ごく限られた地域に許されたことだったなんて。私たちが暮らす熊本の水の豊かさ、そしてそれが貴重なことであると知った瞬間だった。

日本に帰ってからしばらくして、私は水の科学館に行く機会があった。そこには、水道や地下水について学べる展示物や映像シアター、実験を通して水に関する学習ができる実験室などがあった。その中でも特に目を引いたのは、水の循環が学べるコーナーだった。そこで私は水運用の仕事をクイズ形式で学んだり、汚れた水がきれいになる仕組みを体験したりして初めて、私たちが使った水の行方や、汚れた水がどのようにきれいになるのかを知った。水道をひねると出てくるきれいな水は、私たちが使った水がきれいにされ、海に出て、それが雨となり、地下水となる。そしてまた、私たちのもとにやってくる。つまり、私たちも水の流れるの一部となっていたのだ。私たちの行いによっては水環境の危機を招くかもしれない。そう考えると、水環境の未来を担う責任の重さを感じられた。

ところが、上下水道の設備が整い、安心してきれいな水が得られる日本にも、水問題があったのだ。

それらは、豪雨による洪水や土砂災害、水質汚染などだ。特に水質汚染は戦後の急速な上下水道の整備や排水の強化によって改善傾向にある

にもかかわらず、ゴミの不法投棄や施設の老朽化によって水質が悪化する可能性があるという。これは日本だけにかかわらず、全世界にも共通することだ。また、それ以前に世界には上下水道の設備が整っておらず、きれいな水を得られない人々もいる。なんと、きれいな水が得られないことが原因で、毎年百五十万人以上の子供たちが感染症によって死亡しているそうなのだ。このように水は、健康を保つためには欠かせない存在であると同時に、きれいな水は女性、少女たちを水汲みの苦勞から解放させ、女性を社会参加へと導くのだそうだ。これを知ったとき、きれいな水の重要さを実感するとともに、「きれいな水は当たり前じゃないんだ。」と身に沁みて感じた。

それから私は、きれいな水を保つために、自分にできることをした。まだきれいな水が得られないところに井戸や水道施設の設置をすることはできなくても、まずは身の周りの水環境を守っていくことが大切だと私は考えた。簡単なことではあるが、飲み物や食べ物は飲食できる分だけついでに、汚れた皿などは拭いてから洗ったり、野菜の切りくずなど細かいゴミは流さないようにしたりしている。このような一人一人の小さな意識が積み重なって初めて、水環境は守られるのではないだろうか。これからも自分にできることを探して、「当たり前」ではないきれいな水を守っていききたい。